國學院大學学術情報リポジトリ

國學院大學図書館所蔵『張良物語』の解題と翻刻

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 針本, 正行 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000657

國學院大學図書館所蔵『張良物語』の解題と翻刻

針本正行

はじめに

國學院大學図書館に絵巻物の体裁を持つ『張良物語』二軸（國學院大本）が収蔵されている。『張良物語』は、絵巻形態として、ニューヨーク公立図書館スペンサーコレクション所蔵二軸（スペンサー本）[1]、学習院大学日本語日本文学科研究室所蔵二軸（学習院大本）[2]、石川透氏所蔵二軸（石川本）[3]、京都大学附属図書館所蔵『漢楚軍談画巻物』二軸、冊子形態として、中京大学図書館所蔵一冊（中京大本）[4]、大阪大谷大学図書館所蔵二冊（大阪大谷大本）[5]などが確認されている。

本稿では、これまでの研究成果をふまえて、全文を翻刻した上で、挿絵の構図、詞書書写者の検証を通して、國學院大本『張良物語』の特徴を明らかにしたい。

【書誌】

二軸。料紙は鳥の子紙で下絵は金泥草花文様。紙高は三三・二糎。上巻の長さは凡そ一〇・三米、下巻の長さは凡そ

一一・五四米。挿絵は上巻に六図、下巻に五図。箱の上蓋内側に「ちやうりやう物語」との墨書の題箋がある。

一、國學院大本『張良物語』の本文

國學院大本『張良物語』は、秦の始皇帝の行幸を襲うも失敗した張良が、翁から兵法書一巻を授かるという子房取履譚を経て、沛公の臣として、咸陽宮に入るも（上巻）、沛公が項羽に先んじて咸陽宮に入城したことにより、沛公と項羽の覇権争いとなり、鴻門の会で張良の洞察力により沛公が難を逃れ、最後に、追い詰められた項羽が自身の首を斬り、その後、張良が翁の形代である黄石を祀ることにより長寿を得たことが語られて、祝儀性もって終焉する（下巻）。

さて、『張良物語』の本文について、黒田彰氏は、スペンサー本と大阪大谷本は別系統であると指摘され[6]、柳沢昌紀氏は、黒田彰氏のご論をもとに、スペンサー本を甲本とし、その他の諸本を乙本とした[7]。あらためて、スペンサー本『ちやうりやう』と國學院大本『張良物語』の、それぞれの冒頭と末尾の本文を掲げることにより、國學院大本『張良物語』の本文について考えてみたい。

スペンサー本『ちやうりやう』は次のようにはじまる。

むかしもろこしかんの高祖皇帝のしんかにちやうりやうと申てちほうゆゝしきめいしやう有けり、これすなはち三けつのう一なり、せうかとかんしんとちやうりやうと三人を三けつと申なり、十人か中か一人えらひ出してこれを選と名つけ、百人か中より一人すくり出してこれを俊といふ、千人か中よりえらひいたしたるを英と云、万人か中より一人えらひ出して是を傑と申也

國學院大本『張良物語』は次のようにはじまる。

それ四かいをおさめて天下に良将の名をほとこす事はかならすしも心たけくちから人にすくれたるをもつてせすたゝ仁義あつくしてつはものをないかしろにせすちうせつをつくしてわたくしなくはかりことかしこくしてこゝろたゆまさる時はその心さし天理にかなひ人みなこれにしたかひてきはをのつからしりうき國家すなはちたいらかなり是を名つけて忠臣良将とすいはゆる呂望は周の武わうをたすけはんれいは越のこうせんをすくふこれみなその君の非をいさめせんをすゝめて天下をおさめし忠臣なりその外代々の君わういつれかちうしんりやうしやうのこうによらすして天下をたもちしためしをきかすこゝにかんのかうその臣下張良と聞しあさなはをは子房と名つく

右に示したように、スペンサー本は「智謀」に長けた張良像を志向するのに対して、國學院大本は、呂望や范蠡とならんで、「たゝ仁義あつくしてつはものをないかしろにせすちうせつをつくしてわたくしなくはかりことかしこく」と、君王に奉仕する「忠臣良将」を構想するものである。

スペンサー本『ちやうりやう』は次のように終わる。

その丶ちちやうりやうくはうせきこうにえつしておんをしやせんとおもふて、こくしやう山にいたりてたつねもとむれとも、その行ゑしれる人なし、山のふもとにしてきなるいしのありしを見て、これなん黄石公成へしとてやしろをつくりおさめたてまつりおさめたてまつりて、四季のまつりをとゝへねんころにしやとくの心さしをつくしけり（挿絵）

抑黄石公と申は、まりし天のすいしやく也、ちやうりやうと申は妙音ほさつのけしん也、しんのしはうていかほうをもつて人みんをくるしめうしなふことをかなしみ給ふゆへに、かりにこの土にしゆつせして天下をくつかへし秦の代をほろほして漢の代となし給ふ、漢家四百年ほうそをなかくたもちしことかいひやくこうきはくつをと

りしかひの橋なり、めてたかりしためし成へし

國學院大本『張良物語』の下巻末尾は次の通りである。

つゐにかううかうそ八ケ年七十餘度たゝかひありしにかううたちまちにうんつきてをうかうのほとりにむなしくなりかんのかうそいくさにうちかち天下すみやかにおさまり漢の世つたはりて七百年をたもちし事はこれしかしなから張良かはかりことよりおこれり抑張良はみつから手にかけてほこをふりいくさをせしこと一度もなしたゝはかりことをむねとしてかたきをたいらけ天下をおさめたりされは漢のかう祖のいはくはかりことをいあくのうちにめくらしてかつことを千里の外にけつせしものは子房なりとのたまひけりそのかほかたちたけからすいかにもゆうにうつくしくさなから児のことくなれともそのちゑふかくしてはかりことは天下におこなはれて忠臣良将のほまれをはいまの世まてもつたへたりさても下邳の橋にておきなにけいやくせしことく十三年の後穀城山のふもとにして黄なる石をもとめえてつねにこれをまつりしか後に赤松子といふ仙人にしたかひて長生の薬をなめこんろん山にのほりつゝ西わう母ともろともに命をたもちけるとかや

右に示したように、スペンサー本『ちやうりやう』の巻末は、「抑黄石公と申は、まりし天のすいしやく也、ちやうりやうと申は妙音ほさつのけしん也」と、黄石公と張良の本地が語られ、「秦の代をほろほして漢の代となし給ふ、漢家四百年ほうそをなかくたもちしことかいひやくこうきはくつをとりしかひの橋なり、めてたかりしためし成へし」と、子房取履譚をもって終わる。國學院大本『張良物語』の巻末は、忠臣良将である張良が、「穀城山のふもとにして黄なる石をもとめえてつねにこれをまつりしか後に赤松子といふ仙人にしたかひて長生の薬をなめこんろん山にのほりつゝ西わう母ともろともに命をたもちけるとかや」と、下邳の橋で翁との契約通り、翁の形代である黄石を祀ったことで、張良は「長生の薬をなめこんろん山に登り」長寿を全うしたと、張良の一代記として語り収める。

スペンサー本『ちやうりやう』と國學院大本『張良物語』とは、諸本校合を検討するまでもなく、別個の『張良物語』であるといえる。

二、國學院大本『張良物語』の挿絵の構図

國學院大本の『張良物語』の挿絵は上巻に六図、下巻には五図ある。本節では、國學院大本の挿絵の構図の特徴について、対応する本文を挙げるとともに、石川本、学習院大本の挿絵の構図とも比較しながら述べてみたい。(8)

上巻第一図は張良が叢に隠れて秦の始皇帝の行幸を待ち受けている場面である。本文「家のらうたうおほき中にちからつよきもの三百人をかたらひてくろかねをもつておもさ百十斤のまろかしをつくり始皇のみゆきをまちゐたり」に相当する。右画面の手前に張良と郎党一人、左画面に九人の郎党が描かれている。「くろかね」は見えない。なお、石川本は、画面中央奥に川水、中央に張良、その右に三人の郎党、左に五人を描き、叢ではなく、緑の木々を点在させ、学習院大本は、石川本と同一構図を持ち、画面上部に川水、画面中央に緑の木々の中で張良など四人が謀議し、左画面で二人の郎党が控えている。第二図は二紙分の長大図で、張良が始皇帝行幸襲撃を失敗し、始皇帝行幸の後尾の車が、張良の用意した黒銅で打ち壊された場面である。本文「ちやうりやうかつはものこれをまちうけ草むらのうちよりひそかにかのくろかねのまろかせを始皇の車になけかけけるその間半町はかりへたてたれはまろかせのとひゆくうちに始皇の御くるまは行すきてあとなる車にあたりけれはそのくるまたちまちにみちんにくたけのりたる人おなしくうちくたかれてむなしくなりちやうりゃうか兵ともほいなき事におもひてあとをかすめてかくれけり」に相当する。画面中央から右に逃げる始皇帝の車と、慌てふためき、後ろの車に振り向く従者十二人及び馬に乗った護衛の兵士三人と旗手一人、左画面に黒銅で打ち壊された車、横たわる牛、車の下に押しつぶされた従者などが描かれ、左画面の端に

も慌てふためく始皇帝の従者が配されている。なお、学習院大本は、右画面に、五個の黒銅で打ち壊された始皇帝の高官の車とそれを見守る従者二人、左画面に、御者二人が引く始皇帝の車、その左右に高官がそれぞれ二人、鉾を持った従者三人が描かれている。石川本も、学習院大本と同一の構図を持つものの、右画面には三個の黒銅で打ち壊された高官の車とそれを見守る従者は四人、始皇帝の車に付き添う左右の高官は五人、従者六人に、さらに先導の高官一人が描かれている。第三図は張良が川に入り沓を戴く大蛇と対峙した場面である。本文「張良手をあけてすでに水におほれんとすたちまちに水のそこよりそのたけ二十丈もあるらんとおほゆる大しやうかひ出てなかるゝくつをとつてちやうりやうにむかひてすゝみきたる張良すこしもさはかす劒をぬきてまちかけたり大蛇もこれをおそれすかのくつをちやうりやうにあたへてすなはち水底にそ入にける」に相当する。画面中央に、沓を頭に戴いた龍とおぼしき「大蛇」、その左側に右手に剣を持ち、沓を獲ろうとする張良、橋の上には、左の方へ向かって、左足が素足の翁が馬に乗る様が描かれている。学習院大本と石川本は同一の構図を持ち、画面右に、橋の上で、右足が素足の翁が馬に乗り、右方に向かう様が、中央画面に張良と対峙する大蛇、左画面には右手に剣を持ち、左手を伸ばして川水上にある沓をとろうとしている様が描かれている。なお、張良の容貌は、國學院大本は青年、学習院大本は壮年、石川本は老年の体で描かれている。第四図は張良が翁から兵法書一巻を授けられた場面である。本文「我こゝに一巻の書ありこれをなんちにつたふるなりこれいにしへ太公望か乱をしつむるはかりことなりつゝしみてよくきけこれをよみてこのむねをおこなはゝかならす天子の師となり天下の名大将にはなんちをあふかふるへしいまよりのち十年にはなんちかならす万戸のくらゐにいたるへし十三年の後にせいほくのこくしやうさんふもとにして黄色とあらはれ二たひなんちにあふへしといふかとすれはかきけすことくうせにけり」に相当する。画面中央、橋の中ほどで、左の方に向かう翁が乗馬したまま、右手で兵法書一巻を張良に差し出し、張良は両手を伸ばして受け取ろうとしている。学習院大本と石川

本は同一の構図を持ち、画面中央、橋のたもとで、右の方に向かう翁が乗馬したまま、右手で兵法書一巻を張良に差し出し、張良は両手で受け取ろうとしている。学習院大本と石川本は同一の構図を持つものの、近侍する臣下の配置、人数は異なる。第五図は二紙分の長大図で、項羽と沛公がそれぞれ東西に陣を取り酒宴をしている場面である。本文「すてにかううとはいこうとたいめんしてしゅえんありけるそのときともにけいやくしていはくいつれなりともさきにかんやう宮にみたれいりてしんをほろほしたらんかたをかならす天下の大王とすへしとさためてかううと沛公（はいこう）とをの〳〵にしひかしにわかれてせめのほる」に相当する。画面中央に、右に項羽、左に沛公が椅子に座り対峙し、近侍している者の手元には酒器が見え、宴席の場を象徴する。右画面には、幕の外で十余名が待機している。左画面には、幕の外で警護をする兵士が描かれている。学習院大本と石川本は同一の構図を持ち、右に項羽、左に沛公が椅子に座り対峙し、二人の前には、三種類の酒肴が供され、宴席の場を象徴している。項羽の背後に一人、沛公の背後に二人の高官、その他、幕の内側に学習院大本には五人の高官、石川本には四名の高官と幕の端に三名の者が描かれている。第六図は沛公が項羽に先んじて咸陽宮に入城した場面である。「はいこうはその勢わつかに十万よきなりしかとも礼をあつくして民をあはれみ酒をこのますをこりをきはめすこのゆへにそのみちきはめてたる難所（なんじょ）なりしかともさゝへてふせく城（じやう）もなくかうさんせさる兵もなけれはみちひらけて心やすかりける故にかううにさきたつ事三つきにしてかんやうきうに入給ひけれはしんの國みな沛公にしたかひけりこれちやうりやうかはかりことによるものなり」に相当する。画面中央手前に函谷関を象徴する松の木の生えた小山、右画面には宮邸内に沛公と張良（か）、外に兵士二人、左画面に沛公軍の兵士が旗を掲げて控えている。学習院大本と石川本は同一の構図を持ち、左画面に咸陽宮内の階上の部屋で、学習院大本は二人、石川本には四人の談義する様が、正面手前には学習院大本に四人の兵士、石川本には六人の兵士が描かれている。

下巻の第一図は二紙分の長大図で、項羽軍が咸陽宮を攻めて火をかけた場面である。本文「かううかつにのりてせめつゝみをうつてをしよせかんやうきうにみたれ入てすなはち火をかけたりけれはかんやう宮四はう三百七十里につくりならへたる宮殿らうかく一とうにもえあかりひとつものこらすやけくつれてその火九十日まできえさりけりしんの三世子嬰皇帝もこの時にあたつてかうううかためにころされ給ひてしんの代たちまちにほろひけるこそあはれなれ」に相当する。画面右端に、函谷関を象徴する松の木の生えた小山、画面右に、函谷関を越えて攻め入る項羽軍、中央画面手前には、項羽軍の兵士に組し抱かれている兵士、左画面には敗走する兵士、画面上部には炎上する咸陽宮が描かれている。学習院大本と石川本とは同一の構図を持つものの、石川本は二紙分の長大図であり、学習院大本は一紙分である。石川本は、画面左の一紙分に咸陽宮に攻め入ろうとする項羽軍を配し、左画面には炎上する咸陽宮が描かれている。学習院大本は石川本の左画面の一紙分に相当し、左画面に炎上する咸陽宮を強調している。第二図は二紙分の長大図で、沛公が項羽の使者項伯をもてなした場面である。本文「兵をつかはしてかんこの関をまもらせしことはまつたくかううをふせくにはあらすらんはうのぬす人をととめんかためなりねかはくはこのよしをかううにかたり給はるへしわれ明日はそのちんにゆきてつみなきとをりを申ひらくへしとてわうこん百きんを出されたりかうはくすなはち我にまかせたまへと申て馬にうちのりてわかぢんへそかへりける」に相当する。右画面には馬から下りて休息をとる沛公の従者たち、中央画面の軟障、左画面の奥に椅子に座る沛公、その右側に黄金百斤に見入る項伯が描かれている。学習院大本と石川本とは同一の構図を持つ。左画面の軟障の内に、椅子に座る沛公、画面中央には、黄金などの財物に見入る項伯、画面中央上部には、沛公軍の兵士が横になる様、軟障の外に沛公軍の兵士が休息している様が描かれている。第三図も二紙分の長大図で、樊噲が鴻門の宴で項羽をにらんだ場面である。本文「はんくわいすてにまくのうちにかけまいりて目を見ひらきてかううをはたとにらむにまことにいかれるよそほひたけく見えてか

しらのかみさかさまにたちあかりてかふとのはちをつらぬき両のまなしりさけて血なかれたりそのたけ九尺七寸ありていかれるひけ右ひたりにわかれたるかほこをつきて立たるありさまいかなる神もおそれなんとそ見えたりける」に相当する。右画面には、軍門を通って、項羽の兵士が打ち破られた後の様、中央画面に、幕の内に入り廊下に鉾を持って項羽を睨む樊噲、左画面奥に項羽、中央に沛公、その前には剣を持って太平の曲を舞う項伯と范曹が描かれている。学習院大本と石川本も、國學院大本と同一の構図を持つ。ただ、國學院大本にはない、沛公の背後に公を守るように張良とおぼしき兵士が描かれている。第四図は張良が項羽の使者を騙した場面である。本文「それかしはかうの使者にてこそあれと申けれは張良いつはりおとろきていひけるは我なんちをはんそうのつかひなりとおもひて一大事のはかりことをかたり出しけるこそくやしけれさてはなんちはかうのししやにてありけるものをこれとりつくひとのあやまりなりといふてさまさまにつみをきたるひきてものをみなとりかへしさけもさかなもみなことことくとり入れてふけふにしてこそかへしけれ」に相当する。左画面には、部屋の中で使者を迎える張良、廊下で張良に対峙する項羽の使者、その前に引き出物、右画面には庭で項羽の使者の馬をおさえる張良の従者が描かれる。学習院大本と石川本も、國學院大本と同一の構図を持つものの、使者は國學院大本と異なり、部屋の内で張良と対峙している。第五図は項羽が自身の首を斬りさしあげた場面である。本文「かうういまはこれまてなりとて漢の司馬呂馬童といふものむかしは項羽の知音なりけれは我首をはりよはとうにあたゆるとてかううみつから首かききつてさしあけ立すくみしに給ふ」に相当する。右画面に、項羽を追い詰めた張良の兵士とそれに立ち向かう項羽の兵士、左画面に、項羽の死を確認するかのように馬に乗った張良、その前で自らの首を斬り、剣の先に掲げた項羽が描かれている。学習院大本と石川本も、國學院大本と同一の構図を持つものの、項羽は右手に剣を持ち、左手に自らの首を持っている。

学習院大本と石川本との構図の類似性は、両絵巻の制作に与った絵草紙屋が同じであったとの蓋然性はあると思量

される。

以上から、國學院大本『張良物語』の挿絵の構図は、学習院大本と石川本のそれとは異なるものの、張良の一代記に奉仕するものであるといえる。

三、國學院大本『張良物語』の詞書書写者

本節では、國學院大本『張良物語』の詞書と、國學院大學図書館に所蔵されている『舟のゐとく』[9]・『呉越絵』[10]・『咸陽宮』[11]・『八幡の本地』[12]・『清重』[13]のそれらとを比較検討することにより、國學院大本『張良物語』詞書書写者について考えてみたい[14]。

石川透氏は、國學院大學図書館所蔵『竹取物語絵巻』二点（武田祐吉博士旧蔵本及びハイド旧蔵本）の詞書書写者が、埼玉県立歴史と民俗の博物館所蔵『太平記絵巻』と同じであること[15]、また、國學院大學所蔵『武家繁昌』の詞書書写者は仮名草子作家の浅井了意であること[16]、さらに國學院大學図書館所蔵『住吉物語』（三冊本）の書写者は朝倉重賢であると論述されている[17]。

では、國學院大學図書館所蔵『張良物語』の詞書書写者が、誰か特定できるのであろうか。

参考図《『張良物語』詞書の書写者》として、『張良物語』と國學院大學図書館に所蔵されている『舟のゐとく』・『呉越絵』・『咸陽宮』・『八幡の本地』・『清重』の冒頭の詞書を掲げてみた。『張良物語』は、『清重』を除き[18]、『咸陽宮』、『舟のゐとく』、『呉越絵』、『八幡の本地』と同じく、料紙の趣向をはじめ、一紙の行数、字数など、江戸時代前期（寛文・延宝期頃）の大型物語絵巻の体裁を有している。また、六つの作品における、「て」、「乃」、「代」、「人」、「國」などの文字の崩し方も酷似し、さらに、漢字の振り仮名の方法も同一である。

以上から、國學院大本『張良物語』の詞書書写者は、國學院大學図書館に所蔵されている『舟のゐとく』・『呉越絵』・『咸陽宮』・『八幡の本地』・『清重』と同一であると思量されるのである。

註

（1）スペンサー本の翻刻については、松田存氏「スペンサー・コレクション巻子繪巻「ちやうりやう」（「二条學舎大學東洋學研究所集刊　第二三集」平成四年（一九九二）度）がある。松田氏は、奈良絵本『張良物語』の成立について、「すでに幸若舞曲やお伽草子等との類似した諸本の存在が認められてはいるが、それらがきわめて複雑なかかわりを有しており、和泉流間狂言（『狂言集成』による）の口調にも類似する本翻刻によってある程度その解明の糸口が得られそうに考えられることである。」と、狂言との関係の可能性を指摘されている。

（2）学習院大本は二軸、料紙は鳥の子紙で下絵は金泥草花文様、紙高は三三・二糎、上巻の長さ凡そ一二・五米、下巻の長さ凡そ一二・六米、挿絵は上巻に六図、下巻に五図ある。題箋に「張良物語上（下）」（縦十八・二糎、横三・五糎）とある。詞書は、一行二十字前後、漢字平仮名交じり、漢字に平仮名のルビが付されている。学習院大本の書誌については、すでに、柳沢昌紀氏後掲注4論及び高山尚子氏後掲注5論で報告されている。筆者も、今般、学習院大本の熟覧調査の機会をいただいた。ご許可いただいた学習院大学日本語日本文学科研究室に深謝申し上げます。また、調査、写真撮影にあたって、千野裕子氏、武藤那賀子氏のご高配をいただきました。御礼申し上げます。

（3）今般、石川透氏から氏所蔵の『張良』二軸の画像資料を提供していただいた。心から感謝申し上げたい。

（4）中京大学本の解題、翻刻については、柳沢昌紀氏「奈良絵本『張良』解題・翻刻」（「文学部紀要第四十二巻第二号」中京大学文学部　二〇〇八）がある。柳沢氏は、中京大本の特徴について、宮田和美氏「「張良」の大蛇」（「能楽タイムズ」三六八、昭和五七年一月）、黒田彰氏「能と注釈1「張良考」」（『中世説話の文学史的環境』和泉書院　昭和六二年）のご論をふまえながら、「本学図書館の絵本の内容は、謡曲でも幸若舞曲でもない。上巻に子房取履譚は出てくるが、その後に『史記』項羽本紀に記される内容が書かれている。項羽と沛公（後に漢の高祖となる劉邦）が蜂起し、咸陽宮に攻め入って秦を

滅ぼす話、さらに有名な鴻門の会の話、そして四面楚歌の話がさらりと付け加えられていて、項羽が自刃する場面が描かれている。つまり中京大本の内容は、張良の一代記とも言うべき物語となっており、御伽草子と位置づけられるものなのである。」と指摘されている。

（5）大阪大谷大本の翻刻については、高山尚子氏「大阪大谷大学蔵奈良絵本『張良』翻刻ならびに國學院大學蔵絵巻『張良』一部校異」（「立正大学　國語國文　第四八号」立正大学國語國文学会　平成二二年三月）がある。高山氏は、大阪大谷大本の翻刻本文に、國學院大本の本文を対校させて、校異の箇所を指摘されている

（6）黒田彰氏は、スペンサー本と大阪大谷大本は別系統と指摘された（前掲注４　黒田氏論）。

（7）柳沢昌紀氏は、黒田彰氏のご論をもとに、スペンサー本を甲本とし、その他の諸本を乙本とし、「中京大本は、大阪大谷大本とほぼ同じ本文を有する。漢字と仮名の違いや読み仮名が付される箇所の違いはあるが、同一の本文を底本として書写されたものではないかと思われる。さらに言えば、学習院大学日本語日本文学科研究室蔵絵巻、國學院大學図書館蔵絵巻、京都大学附属図書館蔵絵巻も、殆ど同一の本文を持つことが判明した。」と指摘されている（前掲注４　柳沢氏論）。

（8）なお、柳沢昌紀氏は、中京大本と学習院大本の挿絵の構図の類似性をもとに、「学習院大本は絵巻であるから、形態上絵が横長になる。しかしながら、老人、すなわち黄石公と張良の位置取りは中京大本と一致する。実は、この挿絵に限らず殆どの挿絵において、学習院大本と中京大本は構図がよく似ている。人物の描き方も黄石公の容貌こそ全く異なるが、ほかの挿絵における武将の顔の描き方など、かなり似通っている。同一の絵師によるものとして良いかどうかは判断を留保するが、同じ雛形を利用したことが推定できる。この両本の挿絵が、同じ雛形を利用しうる親しい関係の絵師によって描かれたとすることは、許されるであろう」（前掲注４　柳沢氏論）と、中京大本と学習院大本の絵師の近親性について論究されている。

（9）國學院大學図書館所蔵『舟のゐとく』の詞書の書写者について、筆者も指摘したことがある（針本正行・山本岳史「國學院大學図書館所蔵『舟のゐとく』の解題と翻刻」國學院大學校史・学術資産研究第二号　平成二十二年三月）。

（10）國學院大學図書館所蔵『呉越絵』の詞書の書写者について、筆者も指摘したことがある（針本正行・山本岳史「國學院大學図書館所蔵『呉越絵』の解題と翻刻」國學院大學校史・学術資産研究第三号　平成二十三年三月）。

（11）國學院大學図書館所蔵『咸陽宮』の詞書の書写者について、筆者も指摘したことがある（針本正行・山本岳史「國學院大

學図書館所蔵『咸陽宮』の解題と翻刻」國學院大學校史・学術資産研究第六号　平成二十六年三月）。

（12）二軸、料紙は鳥の子紙で下絵は金泥草花文様、紙高は三三・二糎、挿絵は上巻に六図、下巻に六図ある（『國學院大學創立百三十周年記念　國學院大學古典籍解題　中世散文文学篇』「【三〇五】八幡の本地絵巻」五九二・二頁　平成二十六年二月　國學院大學）。

（13）一軸、料紙は鳥の子紙で下絵は金泥草花文様、紙高は三三・二糎、挿絵は七図ある（『國學院大學創立百三十周年記念　國學院大學古典籍解題　中世散文文学篇』「【二六七】舞の本絵巻　清重」五一六・七頁　平成二十六年二月）。

（14）柳沢昌紀氏は、石川透氏のご論（『奈良絵本・絵巻の生成』（平成十五年　三弥井書店）をもとに、「学習院大本だが、結論から言えば、國學院大本同様太平記絵巻の筆跡と思われる。石川氏によれば、太平記絵巻の筆跡の特徴は「平仮名『あ』が縦にへこむこと、『を』の突き抜け方、『い』が縦に短くなること」等だそうであるが、それらが埼玉県立歴史と民俗の博物館蔵『太平記』絵巻とよく似ている。この筆跡が見られるのは、殆どが大型絵巻物のようである。」と、國學院大本『張良物語』と学習院大本『張良物語』の詞書書写者は、同一であると指摘されている（前掲注4　柳沢氏論）。

（15）石川透氏は、國學院大學図書館所蔵『竹取物語絵巻』二点（武田祐吉博士旧蔵本及びハイド旧蔵本）の詞書書写者が、埼玉県立歴史と民俗の博物館所蔵『太平記絵巻』五軸と同一であると指摘する。また、石川氏は、慶應義塾大学斯道文庫所蔵『竹取物語』絵巻、チエスタービイティ図書館所蔵『舞の本絵巻』六軸、さらには、海の見える杜美術館蔵『保元・平治物語絵巻』なども同一書写者によるものとされている（「國學院大學図書館蔵奈良絵本・絵巻」針本正行編『物語絵の世界』八二～三頁　平成二十二年三月）、石川透氏・星瑞穂氏編『海の見える杜美術館蔵保元・平治物語絵巻をよむ　清盛栄華の物語』石川透氏「『保元・平治物語絵巻』について」九三～一〇一頁　平成二十四年七月　三弥井書店）。

（16）石川透氏は、國學院大學所蔵『武家繁昌』絵巻二軸の詞書書写者は仮名草子作家の浅井了意であること、近似するものとして、大阪大谷大学図書館蔵『俵藤太絵巻』二軸、海の見える杜の美術館蔵『義経都話絵巻』二軸、町田市立博物館蔵『たはらかさね耕作絵巻』二軸、古代出雲歴史博物館蔵『大黒舞』二軸、石川透氏蔵『蓬莱山』、さらには、チエスタービイティ図書館所蔵『義経地獄破り』二冊などを挙げられている（前掲注15　石川氏論『物語絵の世界』　七八～八一頁）。

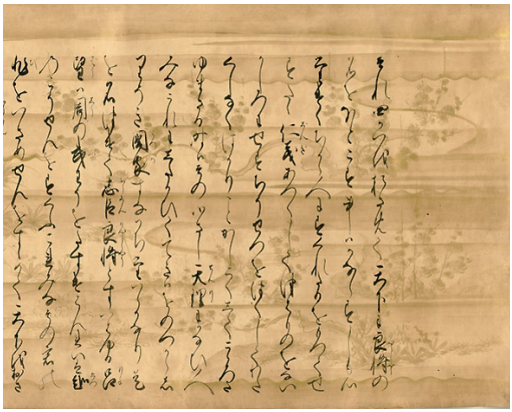
（17）石川透氏は、國學院大學図書館所蔵奈良絵本『住吉物語』（三冊本）の詞書書写者は朝倉重賢であること、近似するもの

として、慶應義塾図書館所蔵『友長』二軸、ボストン美術館所蔵『天狗の内裏』、フリーア美術館所蔵『玉藻の草子』なども挙げられている（前掲注15　石川氏論『物語絵の世界』　八三～六頁）。筆者も、國學院大學図書館所蔵奈良絵本『住吉物語』（三冊本）に、「源小泉／大和大極」「烏丸通櫻馬場町／御繪雙紙屋／大和小泉」の印記があること（針本正行「國學院大學所蔵の絵入り物語」『中古文学八十六号』平成二二年十月）、また、近年、國學院大學図書館に収蔵された『かくれ里』絵巻二軸、『義経奥州都落ち絵詞』にも、奈良絵本『住吉物語』（三冊本）と、同一の印記があることを報告した（針本正行・山本岳史「國學院大學図書館所蔵『かくれ里』の解題と翻刻」國學院大學校史・学術資産研究第七号　平成二十七年三月）。

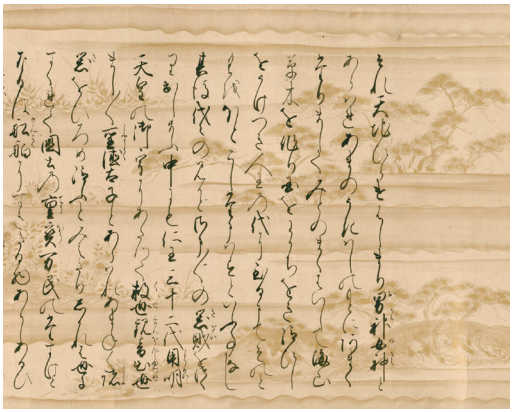
(18)　國學院大學図書館所蔵『清重』は、紙高は三三・二糎と、江戸時代前期（寛文・延宝期頃）の大型物語絵巻の体裁を有しているものの、一行の字数は二十五字前後であり、國學院大學図書館所蔵『張良物語』をはじめ、『舟のゐとく』・『呉越絵』・『咸陽宮』・『八幡の本地』の一行の字数が二十字前後とは異なる。

＊國學院大學図書館所蔵『張良物語』をはじめ、『舟のゐとく』・『呉越絵』・『咸陽宮』・『八幡の本地』・『清重』の調査、閲覧にあたり、國學院大學図書館の方々にご高配をいただいた、あらためて深謝申し上げます。

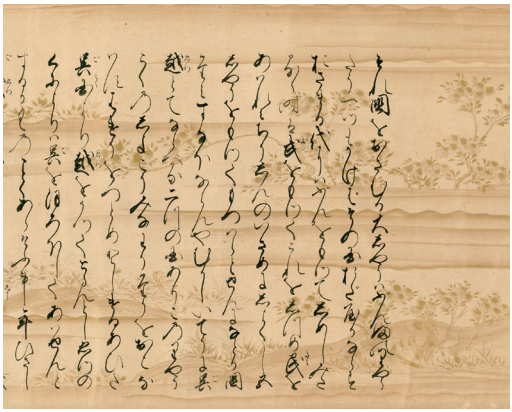
《参考『張良物語』詞書書写者》



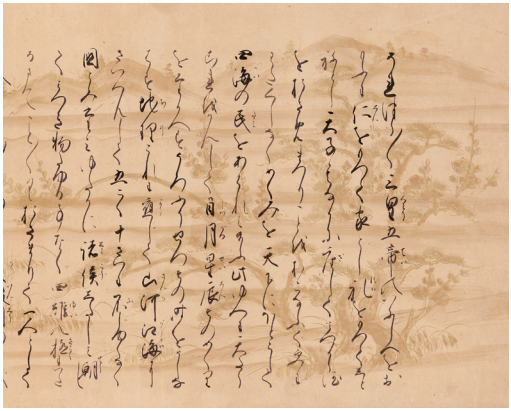
『張良物語』冒頭



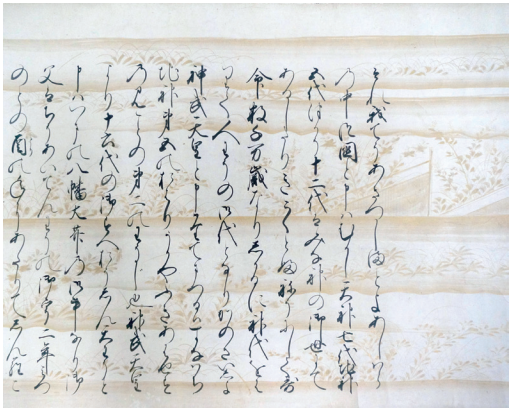
『舟のゐとく』冒頭



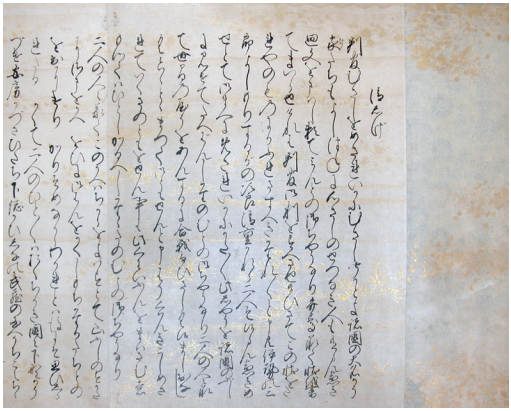
『呉越絵』冒頭



『咸陽宮』冒頭



『八幡の本地』冒頭



『清重』冒頭

張良物語　翻刻

上巻

それ四かいをおさめて天下に良将の
名をほとこす事はかならすしも心
たけくちから人にすくれたるをもつてせ
すた、仁義あつくしてつはものをない
かしろにせすちうせつをつくしてわた
くしなくはかりことかしこくしてこゝろた
ゆまさる時はその心さし天理にかなひ人
みなこれにしたかひてきはをのつからし
りそき國家すなはちたいらかなり是
を名つけて忠臣良将とすいはゆる呂
望は周の武わうをたすけはんれいは越
のこうせんをすくふこれみなその君の
非をいさめせんをすゝめて天下をおさ
めし忠臣なりその外代々の君わういつ
れかちうしんりやうしやうのこうによらす
して天下をたもちしためしをきかす」一紙
こゝにかんのかうその臣下張良と聞えしは
あさなはをは子房と名つくそのせんそを
たつぬれは韓の國の臣下として昭
王よりたうけいわうまて五代の間
よゝにつかへてわたくしなししかるにしん
の始皇のときにいたりてかんのたうけい
わうすてに始皇のためにほろほされた
まふこのとき張良いまた年わかくして
身をかくしてのかるゝ事をえたり張
良つら〳〵おもひけるは我いにもして始皇を
ころして我君のうらみをはらすへきと思ひ

家のらうとうおほき中にちからつよき
もの三百人をかたらひてくろかねをもつて
おもさ百二十斤のまろかしをつくり始
皇のみゆきをまちゐたり始皇これを
は夢にもしろしめされすあるとき数百
よきをしたかへてやうふといふ所よりみなみ
にあたりてはくらうさといふ所を
とをり給ふに」二紙

第一図　張良、叢に隠れて始皇帝の行幸を待つ。

ちやうりやうかつはものこれをまちうけ
草むらのうちよりひそかにかのくろか
ねのまろかせを始皇の車になけかけゝる
その間半町はかりへたてたれはまろ
かせのとひゆくうちに始皇の御くるまは
行すきてあとなる車にあたりけれは
そのくるまたちまちにみちんにくたけの
りたる人おなしくうちくたかれてむなし
くなるちやうりやうか兵ともほいなき事に
おもひてあとをかすめてかくれけり始
皇のつはものとも大きにおとろき馬を
はせてをひゆきこゝかしこをたつぬ
れともさらに人はなかりけり山のうちへ
やかくれぬらんと谷みねをさかしけれ共
そのかくれかは見えさりけりこゝに一人し
はをかるものゝありけるをとらへてたか
手小手にいましめて始皇の御まへに
めしいたすなんちはいかなるものなれはわ
れにむかつてあたをなすそとありけ
れはそれかしは河南と申すところの」四紙
木こりにて侍るなりまつたく君にむ
かひてなにのあたをかなし奉るへきけ
に〳〵このほとうけたまはりしはかんの
たうけいわうの臣下にちやうりやうと
申すもの君をうらみたてまつりその一

そくらうとうの中にちからつよきもの
ともを三百人かたらひて君をうかゝひたて
まつるとつたへ聞侍へるもしもこれらか
しわさなるへきにやと申あけけれは始
皇きこしめされてさてはなんちかしるへ
きところにあらすとてすなはちなはを
ときてゆるされけり始皇はそれよりみ
やこにかへらせ給ふ」五紙

第二図　張良、始皇帝の行幸襲撃を失敗する。

始皇大きにいかりて天下にちよくを
くたし張良といふものをもしはいけと
りもしはかうへをはねてみかとに奉らん
ものをはたとひその一そくらうとう
なりといふとも命をゆるしこかね一万
斤を給はるへしとそふれられけるかゝ」八紙
りしかは張良も身をかくすへきところ
もなしあまつさへその一そくらうとう
の中にも一万ぎんのこかねにふけり
てひまをうかゝひねらひけるものいろに
あらはれて見えけれはたのむ木のもとに
雨のもるこゝちしけり張良かなはしと
おもひて夜にまきれて家をたち出て
下邳といふところにけ行て名を
かへかたちをあらためてしはらく身を
かくしゐたりあるときちやうりやう宿
をたち出て下邳のはしをわたらん
としたりけるに年のころ八十にあ
まりたるらうおうふとくたくましき
馬にのりて来たりけるかはきたる沓を
馬のうへより河の中におとしつゝ張良
にむかつて申すやういかになんちあの
沓をとつてわれにはかせよといふ張良
これをきゝてにくきおきなか言葉か
な礼儀をもしらてわれにむかひて沓

とつてはかせよといふこそやすからね」九紙
うたはやとおもひて劒をぬかんとせしか
こゝろのうちにおもひかへしけるやうはいや
〳〵むかしもためしありこうえいは公
子にくつはみをとらしめてそのこゝろを
ためし王生はちやうせきにわらくつ
の緒をむすはしめてそのむねを心
みしいまもつてこれに同しいかなれは我
にむかひて沓をとらせん故なしもし
我こゝろをためして見るにやたとへは
しからすとも老たるをうやまふことはを
のれか父母のことくせよといふ事あり
沓をとつてはかせはやとおもひはしよ
りしたにとんてをりなかるゝくつをと
らんとすもとより下邳の川と申すは
そこふかくしてきしとをしなかるゝ水
矢をいるかことくなれはちやうりやう水
にをりひたりてとらんとするにかなは
すいかゝはせんとあきれたるはかり也
かゝりしところに川のなかれなみを
たゝみさかまく水の音しきりなり」十紙
張良手をあけてすてに水におほれ
むとすたちまちに水のそこよりそ
のたけ二十丈も有らんとおほゆる大
じやうかひ出てなかるゝくつをとつて
ちやうりやうにむかひてすゝみきたる張
良すこしもさはかす劒をぬきて
まちかけたり大蛇もこれをおそれす
かのくつをちやうりやうにあたへて
すなはち水底にそ
入にける」十一紙

第三図　張良、川に入り沓を戴く大蛇と対峙する。

張良沓をうけとりいそき川よりはせ
あかり橋の上にきたつてひさまつき

てたてまつるおきなはすこしもれい
きなくあしをさしいたしてこれをは
きもちたるむちにて張良かかしらを
なて、いひ出すこと葉もなくうちわら
ひて行過きたりちやうりやうふしき
におもひあとをはるかに見をくりて」十三紙
たちやすらふ所にやう〳〵一里かほとも
行ぬらんとおもふにかのおきなたちかへ
りて申けるはなんちはその心たけく
してしかもとをきおもんはかりありち
かきうれへのなかるへきものそかしそれ
人はきやうにんとて物ことにかんにん有
をもつて第一とす百たひたゝかふて
百たひなからかつことありとも一たひし
のふにはしかしと云事あり身をほろ
ほし家をうしなふことはかならすしも
かんにんすることなきによれり我さき
になんちに無礼(ぶれい)をなすさこそ心には
いかりうらみつらんしかれとも一たひ是
をしのひてわかために沓(くつ)をとる事われ
これをかんするところ也しかるにわれ
にひとつのひじゆつありなんちにをしへ
てつたふへしいまより五日といはんあ
かつきこのはしに来るへしそのとき
これをさつけんかならすをこたることな
かれとかたくけいやくしけれはちやうり」十四紙
やうもあやしくおもひすなはちこれを
りやうしやうしてをの〳〵ゆきわかれ
たりかくて張良は五日といふあかつきに
かのはしにたち出たれはおきなははや
それよりさきにきたり橋の上にありし
かいろをそんしいかりをなして申けるは
なんちおきなとかたくけいやくしなから
いかにしてはをそく来りけるそやさやう
にこゝろをこたりてはなにの大事を
かならひえんよし〳〵いまは家にかへり

けふより又五日といはんときかならすこゝ
にきたるへしとておきなはすなはち行
さりけり張良けふのをそかりししこ
とをくちおしくおもひてそれより宿
所にたちかへりこのたひはいかにも身を
きよめこゝろをきよめて衣冠(いくはん)たゝし
く出たち五日といふ夜半はかりに下
邳のはしにそ出たりけるしはらく有て
おきな馬にむちをすゝめてはしの
上にきたりつゝちやうりやうをうち見て」十五紙
大によろこひていはくよきかなやなんち
人に大事をさつからんとするにはかくこそ
はあるへけれこゝろをこたりてはそのせん
なしそれみたるゝをおさめてきをしりそ
くることはかりことにあつてさらに
軍勢(ぐんせい)の多少(たせう)によらす運(うん)は天理のと
きにありいくさやふるゝともみたりに
命をすつることなかれ兵おほしといふ
ててきのつよきにむかつてすゝむる
ことなかれひくへき時にちんをしりそく
はこれにくるといふにあらす兵の命
をまつたくしてのちにひらくる運をま
たんかためなりくんせいにむかひて礼
義をあつくする事はこれへつらふと
いふにはあらす心をひとつにして軍(いくさ)
をすゝめんかためなりされは天の時は
地の利(り)にしかす地の利は人の和(くは)にし
かすといふ事あり天にこきよわう
さうの時あり地にまた八陣(ちん)のそなへ
あり天の時をえたりといふとも地のそな」十六紙
へたかふときはそのいくさかならすまけ
ててきのためにくるしめらるへした
とひ天の時にかなひ地の利をはえた
りといふとも軍勢のこゝろひとつならす
は又そのえきあるへからすたゝつねに
兵のこゝろをひとつにしておこりをとゝ

め礼をあつくせよ我こゝに一巻の書あ
りこれをなんちにつたふる也これいにし
へ太公望か乱をしつむるはかりこと也
つゝしみてよくきけこれをよみてこの
むねをおこなはゝかならす天子の師
となり天下の名大将にはなんちを
あふかふるへしいまよりのち十年には
なんちかならす万戸のくらゐにいたるへし
十三年の後にせいほくのこくじやうさん
ふもとにして黄色とあらはれ二たひなん
ちにあふへしといふかとすれは

かきけすことく
うせに
けり」十七紙

第四図　張良、翁から兵法書一巻を授けられる。

張良はすてに一巻の書をさつかりて
家にかへり夜あけてこれをみるに太公
望か兵法をその言葉つゝまやかにかき
あらはしたりいまにつたはる三略といふ
兵書これなりちやうりやうつねにこれ
をよむ事露はかりもをこたらすつ
ゐにいくさのはかりことにそのしんへん
をえたりきかゝりけるところに楚の
項羽のおちにかうはくといふものあり人
をころしてそのとかのかれかたし身の
をきところのなきまゝに下邳の里に
にけきたり張良かもとにたちよりて
たのむへきよしいひけれはちやうりやう
ふひんにおもひてすなはち我家にかくし
をきてさま〳〵いたはりける程にかう
はく大きによろこひて申けるは我すてに
身をかくすへきところなくいのちあやう
かりしを君にたすけられてなからへける
こそうれしけれもしも事のしさい有

てたとひ我となんちとてきみかたに」十九紙
行わかるゝともこゝろは更にそむくまし
大事のはかりことあらん時はかならすなん
ちにつけしらすへしとかたくけいやくした
りけりこゝにしんの始皇帝は六國
をうちしたかへそのいきほひ天下には
ひこりしかとも天命かきり有てつゐ
にさきうといふところにてほうきよなり
けるをりさんと云ところにおさめ奉る天
下のことはてうかうといふ臣下のはからひ
なりけれは第一の太子ふそと申すを
はてうかうころし奉りてをのれかやし
なひし第二の太子こがいを天子に
なして二世皇帝とそ申けるのちに
これをもころしててうかう天下をうは
ひけるをこかいの御子にしえいと申す
太子有てうかうをころして二たひ
天下をとりかへし給ひてみつから天子と
なり給ふ是を三世皇帝とそ申ける
此時にあたつて楚國にはかうつはも
のをおこしはいきんよりははいこういく」二十紙
さをもよほすと聞えしかはかうはくは
かううのかたにはせくはゝり張良は百よ
きの兵をしたかへて沛公のぢんにくはゝ
る沛公すなはち張良にたいめんし給ひ
やかてきの将と云官をさつけそのは
かりことをもちひ給ふに兵みなきふくして
その勢ほとなく十万よきに成たりぼく
やうといふところのひかしにていくさたち
してしんの國にせめのほり給ふ楚の
かううはみつから四十万きをしたかへて
ようきうといふ所のにしにいたるすてに
かううとはいこうとたいめんしてしゆ
えん有けるそのときともにけいやくし
ていはくいつれなりともさきにかんやう宮
にみたれいりてしんをほろほしたらん

かたをかならす天下の大王とすへしと
さためてかううと沛公とをの〳〵
にしひかしにわかれて
せめのぼる」二一紙

第五図　項羽と沛公、東西に陣を取り酒宴をする。

かくてかううは四十万きのつはもの
をしたかへてきよろくといふところにいた
り給ふにしんの左将軍しやうかんと云
もの百万きにてあひまちけり両陣
たかひに出あひてたゝかふにしやうかん
うちまけてかううかぢんにはせくはゝ
るこの時両ぢんにうたるゝ兵六十万き也
のこるつはものあはて八十万きをいん
そつしてこゝかしこをせめおとすにやふ
られすといふ事なししかれともかうう
はひちよをあいし酒をこのみしかは
道にて日かすををくりてつゐにいまた
かんやうきうにいたらすはいこうはその勢
わつかに十万よきなりしかとも礼をあつ
くして民をあはれみ酒をこのますを
こりをきはめすこのゆへにそのみち
きはめたる難所なりしかともさゝへて
ふせく城もなくかうさんせさる兵もなけ
れはみちひらけて心やすかりける故に
かううにさきたつ事三月にしてかん」二四紙
やうきうに入給ひけれはしんの國みな沛公
にしたかひけりこれちやうりやうかはかり
ことによる物なり三世子嬰皇帝も
かうさんし給ひはいこうにしたかひ給ふ
すなはちちやうりやうをは成信侯に封
ぜられたりやかて兵をつかはしかんこく
の関をかためてかううをかんやうきう
にいれたてしとはからひはいこうは覇
上といふところにそ

おはしける　」二五紙

第六図　沛公、項羽に先んじて咸陽宮に入る。

下巻

か、かりしところにかうう百万騎の兵を
したかへかんこくの関にうちいらんとしける
に関の戸かたくとちてかううをいれた
てすかうう大にいかりてたうやうくん
といふ将軍に二十万きをさしそへかんこく
のせきをうちやふりかんやうきうにせめ
いりけれはしんのつはものかううの軍
勢をふせきてしはらくたゝかひけれとも
かなはすしてみなちり〳〵に成にけり
かううかつにのりてせめつゝみをうつ
てをしよせかんやうきうにみたれいりて
すなはち火をかけたりけれはかんやう宮四
はう三百七十里につくりならへたる宮殿
ろうかく一とうにもえあかりひとつもの
こらすやけくつれてその火九十日まて
きえさりけりしんの三世子嬰皇帝も」一紙
この時にあたつて
かうううかためにころされ
給ひて
しんの代
たちまちに
ほろひ
けるこそ
あはれ
なれ」二紙

第一図　項羽軍、咸陽宮を攻めて火をかける。

さるほとにかううは百万きのつは

ものをあつめてしんほうのかうもん
にちんをとり高祖はわつかに十万
よきにてかんやうの覇上におはし
ますそのみちわつかに三十里をへた
てたりしかるにかううか臣下にはん
さうといへるものかうにつけていは
く沛公そのかみ沛郡にありし時
は美女をあいしたからむさほり酒
をこのみしかいまこのかんやうきうに」五紙
せめいりしよりこのかたはひちよをも
あいせすたからをもむさほらす民をあ
はれみつはものをめくむこれすなはち
そのこゝろさしひとへに天下に大わう
たらんことをのそむこれかならす張
良といへるものゝはかりことかしこきゆへ
なりいそきはいこうをうち給へとすゝめ
けれはかううけにもとおもひ四十万
きのつはものをさしつかはしはんさう
を上将軍として夜あけなはいそき
はいこうをうつへしとそさためけるこゝ
にかううかおちにかうはくといへるは
むかしちやうりやうかなさけによりて
露の命をたすかりけいやくかたくして
ゆきわかれにかううかちんに有けるか
この事を聞てこゝろにおもひけるはみ
かたは四十よ万き也はいこうはわつかに
十万きかゝる無勢にてはかならすは
いこううちまけ給ふへし張良にこの事
をしらせていつかたへもおとさはやとお」六紙
もひてその夜いそき張良かもとに行
てかたりけるはことのていまことにきう
なり今夜いそきいつかたへもにけさり
ていのちをたすかり給へとそ申ける
ちやうりやうはもとよりもはかりことか
しこく義をおもくして忠をもつはら
とするものなりけれは何故か身のかなし

きにまかせてかうそをすてゝいつかた
へかはにけさるへきいふてやかて此よし
を沛公にかたるはいこう聞しめして
いかかすへきとの給ひけれは張良こたへて
いはくみかたのつはものはわつかに十万よ
きかううかつはものは四十万きなり
この平野(ひらの)にてたゝかはゝかつことある
へからすされはとてけんその地もなしと
かくかうはくを御まへによひ出してはい
こうと兄弟ならんことをやくそくした
まひまつこのたひはことの無為(ぶゐ)ならん
やうにしたまひて天命をまち給へと申
けれはかうそけにもとおほしめしす」七紙
なはちかうはくをかうその御まへによ
ひ出しまつさけをすゝめてことふきをな
してはいこうかたりていはくはしめかう
うと我とけいやくをなしけるはさきに
かんやうきうにせめいらんものを天下の王
になすへしとさためたり我かうう
さきたちてかんやうにせめいること七十
日にあまれりされとも我さらに天下の
大王なるへしとは露はかりもおもふ事
なし兵をつかはしてかんこくの関を
まもらせしことはまつたくかううをふせ
くにはあらすらんはうのぬす人をと
とめんかためなりねかはくは此よしをかう
うにかたりて給はるへしわれ明日は
そのちんにゆきてつみなきとをりを
申ひらくへしとてわうこん百きんを出
されたりかうはくすなはち我にまか
せたまへと申て馬にうちのりてわ
かぢんへそかへりける」八紙

第二図　沛公、項羽の使者項伯をもてなす。

さるほとにかうはくかううのちんにかへ

りて沛公の申さるゝ所をつふさにかた
りて重て申しけるはそも〳〵はいこう
かんこくの関をやふりてしんをうちし
たかへすはいかてかかううういまたや
すくこゝに来り給はんやこれ天下の
大こうはしかしなから沛公にありしかる
にはんさうか言葉にまかせてこう有
人をうち給はんは天のみちにたかふに
あらすやたゝ沛公とましはりをふかく
してともに天下をおさめ給へと申け
れは項羽(かうう)けにもとおもひて色をなをし
すなはちいくさをとゝめられけりかゝる所
に沛公百よきの兵をしたかへてしん
ほうのかうもんに来り給ひかうう に
まみえてれいきあつしかううまこと
に心とけてすなはち酒えんにをよひ
けりはんさうおもひけるは沛公をうたん
事は今日にあらすはかなふへからすもし
此たひもらしなはかううはむなしく」十一紙
はいこうにころされ給ふへしいかさまに
も沛公をたはかりころさはやとおもひ
かうさうと云臣下をよひたてゝなん
ちはいこうのまへにさかつきのあらん時
にことふきしてつるきをぬきてたつ
てまふへし我もそのときもろともに
立てまふかことくにもてなし沛公をうつ
へしとさためたりかうさうすなはち
ざしきに出てみつからしやくをとりはい
こうをことふきす沛公さかつきをかたふ
け給ふときかうさう申ていはくわか君
はいこうとしゆえんあり軍中久しく
音楽(をんがく)をなさすたゝ今われ劔をぬき
て太平の曲(きよく)をまふへしとてすなは
ち劔をぬきて立そのときはんそうも
もろともに劔をぬきてさしかさし沛
公のまへによりけりかうはくかれらか気

色を見てはいこうをうたせしとおもひ
われもともにまふへしとておなしく又劔
をぬきて立てまふはんそう沛公にちか」十二紙
つけはかうはく身をもつて立かくし
けれはがくすてにをはらんとするまて
沛公をうつ事かなはす張良やすから
すおもひて門前にはしり出はんくわ
いをまねきて申けるははんそうつるき
をぬきて立てまふそのこゝろすてに
はいこうをうたんとすとかたりけれははん
くわい聞てさては一大事のんとにせ
まれりとてかふとのををしめたてを
わきにはさみ軍門にいらんとすけいこ
の兵五百人これをいれしとふせきけり
はんくわい大きにいかりをなしくろかね
のたてを身にひきそはめ門のくはん
の木七八本をしをりて内へはしり
いれはたをるゝ戸ひらにうちたを
されくろかねのたてにつきたをされ
て五百人のつはもの地にふしかさなりて
おきあからすはんくわいすてにまくの
うちにかけいりて目を見ひらきてかう
うをはたとにらむにまことにいかれるよ」十三紙
そほひたけく見えてかしらのかみさか
さまにたちあかりてかふとのはちをつ
らぬき両のまなしりさけて血なかれ
たりそのたけ九尺七寸有ていかれる
ひけ右ひたりにわかれたるかほこをつき
て立たるありさまいかなる神も
おそれなんとそ
見えたり
ける」十四紙

第三図　樊噲、鴻門の宴で項羽をにらむ。

項羽（かう）これをみてみつから劔（けん）をぬきかけ

てなんちは何ものそとの給ふ張良かいは
くこれは沛公の兵にはんくわいと申す
ものなりとそ申けるそのときかうう
これはたけき兵なり酒をのめとあり
けれは一斗をもるさかつきにさけを
たふ〳〵とさしうけて三度まてのみ
てゐのこのかたもゝをさかなに出しけ
るをすこしものこさすくらひていさゝ
かもみたるゝけしきなしはいこうはかはや」十七紙
に行まねをしてはんくわいをまねき
てかへり給ふにきんきやうきしんはんくわ
いかこうえいといふ四人のものともたてを
もちほこをとりて沛公を馬にのせわ
きみちより覇上のちんにかへり給ふし
はらく有て張良かううにむかひて申
やう沛公さけにえひて礼をわすれ
てかへりぬそれかしをはとゝめをきて
これを奉るへしと申をかれ侍へるとて
白璧一双をたてまつるかうこれを
よろこひ天下のてうほうなりとてて
うあいし給ふ事かきりなし張良又
たまのさかつきをとりいたしてはん
そうかまへにをきてこれは沛公より
足下にたてまつらるゝと申けれははん
そうこれを地になけなみたをなかして
白へきはてうほうなりといへとも天下に
はかゆへからすわれこれをはかれともさら
にそのせんなしこうわうの天下をうはゝ
むものははいこうなりとてかうをは」十八紙
たとにらみけれともかうはえひふし
てこれを聞いれす張良も百よきを
したかへて覇上にたちかへりけりかゝりし
のちはかうとはいこうとかさねてた
いめんあることなし天下をあらそふ気
色外にあらはれて國々のつはもの両
はうにわかれくはゝる漢楚ふたつにわ

かれて四かいのらんやむことなしかんの
かうそのかたには陳平(ちんへい)張良(ちやうりやう)樊噲(はんくはいり)酈(りい)
食其(きいき)なとをさきとしてその勢つかふ
三十万きなりかううのかたには西陰(せいいん)
わう常山(じやうせん)わう張耳(ちやうじかうりやう)項梁(こうりやう)をはし
めとしてその勢つかふ四百万き也かう
そのかたは無勢なりけれはたひ〳〵
軍にうちまけ給ふこれひとへにかうう
の臣下はんそうかはかりことの故そかし」十九紙
いかにもしてはんそうをうつへしとこそ
せんきしけれあるときかううのかたより
かうそのかたへ使者をつかはしけるに張
良これにたいめんしまつさけをすゝめん
とて山海のちんふつをとゝのへさかなをか
す〳〵いたしこかね四万きんをつかひ
のまへにとりすへ其外いろ〳〵のたか
ら物を山のことくにつみかさねひきて
ものにそしたりける張良さま〳〵
物かたりしてとかくはんそうの御こゝろ
とわれらのこゝろをひとつにせすはかうう
をうつ事かなふへからすいよ〳〵はかり
ことをたのみたてまつると云けれは使
者すこしもこゝろえすそれかしはかうう
のししやにてこそあれと申けれは
張良いつはりおとろきていひけるは我
なんちをはんそうのつかひなりとおもひ
て一大事のはかりことをかたり出し
けるこそくやしけれさてはなんちはかうう
の使者にてありけものをこれとりつぐ」二十紙
人のあやまりなりといふてさま〳〵につみ
をきたるひきてものをみなとり返しさ
けもさかなもみなこと〳〵くとりいれてぶ
けうにしてこそかへしけれしやはらをた
て、立かへりかううにこのよしをかたるか
ううおもひけるはさてははんそうかてき
とこゝろをあはせてわれをうたんとする

とこゝろへてやかてはんそうに
どくをあたへて
ころされ
たり」二一紙

第四図　張良、項羽の使者を騙す。

はんそうすてにむなしく成けれは
かうういよ〳〵をこりをきはめ兵をな
いかしろにせしかはかううをうらみてそ
むきかんのかうその手にくはゝる兵数
をしらすさるほとにかううのつはもの
はわつかに十万よきかうその兵は程
なく八百万きに成にけり張良いまは
時いたりぬとよろこひ兵をすゝめてせめ」二三紙
けれはかううかなはしとやおもひけん
かいの城にたてこもるかうその兵ます
〳〵かさなりて城をとりまくこと百重
千重也こゝにかううのおもひ人ぐしと
いふびじんはかなはしともひてじがいし
てむなしくなるかううういまはこゝろに
のこることなしとてわつかにうちのこさ
れしつはもの二十八きをともなひ城
のうちよりきつて出烏江と云川のほ
とりにうち出給ひかうその兵をかけやぶ
るかうそのかたにはわいいんこうか手
にしたかふ兵三十万きかうの二十八
きにかけたてられ三百よきうたれて
にけちりたりそのつきに孔将軍ひ
将軍の手にしたかふかうその兵七十万
きかうを中にとりこめてあまさ
しとせめたゝかふに五百よきうたれて四
はうにけちりたりかうの兵二十
八きのうち十一きうたれてわつかに十七
きになりにけりかうきすをかうふ」二四紙
る事五十余ケしよなりそのときかう

う十七きをしたかへかちたちに成て
ひかへたりかうその将軍せきせんこう
とて大りきの兵のかううをいけとらん
とてわか手のらうとう五万よきかまつ
さきにかけちかつくかうう目をいから
かしてをのれは何ものそ我をうたん
とはちかつくそといかりてにらみ給へはさ
しものせきせんこうのりたる馬もろ
ともにふるひわなゝきてたちすくみた
りかうういまはこれまてなりとて漢
の司馬呂馬童といふものむかしは
かううの知音也けれはわがくびをは
りよばどうにあたゆるとてかううみつ
から首かきゝつてさしあけ立すくみてしに
給ふ」二五紙

第五図　項羽、自身の首を斬る。

つゐにかううかうそ八ケ年七十餘度
たゝかひありしにかううたちまちにうん
つきてをうかうのほとりにむなしくなり
かんのかうそいくさにうちかち天下すみやかに」二七紙
おさまり漢の世つたはりて七百年をたもちし
事はこれしかしなから張良かはかりことよりお
これり抑張良はみつから手にかけてほこをふ
りいくさをせしこと一度もなしたゝはかりこと
をむねとしてかたきをたいらけ天下をお
さめたりされは漢のかう祖のいはくはかりこ
とをゐあくのうちにめくらしてかつことを千
里の外にけつせしものは子房なりとの
たまひけりそのかほかたちたけからすい
かにもゆうにうつくしくさなから児のこと
くなれともそのちゑふかくしてはかりことは
天下におこなはれて忠臣良将のほまれを
はいまの世までもつたへたりさても下邳
の橋にておきなにけいやくせしことく

十三年の後穀城山のふもとにして黄なる
石をもとめえてつねにこれをまつりしか
のちに赤松子といふ仙人にしたかひて長生
の薬をなめこんろん山にのぼりつゝ西
わう母ともろともに命をたもちける

とかや」二八紙